ヴァージニア・リー・バートン『ちいさいおうち』の作者の素顔

美谷島　いく子

バートンの伝記との出会い

絵本『ちいさいおうち』(1942)や『せいめいのれきし』(1962)において、「子どもの世界の原イメージを」S字型曲線で表したヴァージニア・リー・バートン。彼女の生涯については、日本に紹介されている資料は限られており、詳細な部分では、不明なことが多かった(たとえば、父母のルーツや夫デメトリアスからの影響など)。

"Song of Robin Hood"(1947)も、日本では買うことができず、福音館に借りに行ってやっと手にとって見ることができた。

私は、バートンが生まれ活躍した国、アメリカ合衆国に行けば、調べることができ、もっと明確になるかもしれないと思いながら、二人の娘の子育て中で、身動きがとれなかった。

たびたび、カリフォルニア大学で開かれる学会に出張する夫に、バートンの伝記や資料を探してきて欲しいと英文リストを渡して頼み、待っていたが、期待外れだった。後でわかったことだが、夫の探し

方が悪かったわけではなく、アメリカにもまとまった伝記はなかったのだ。しかも、バートンの原画は作品の縁の地に所蔵されていたので、資料も広いアメリカ全土に分散していた。

「バートンの作品の原画を見て研究しようとすることは、アメリカ中を石蹴りあそびで飛んでまわるようなものである」。

長女が大学に入学した年から、短大で教えるようになっていた私は、二〇〇〇年に、三十年も探し求めていた〝Song of Robin Hood〟を偶然立ち寄った銀座の教文館の洋書売り場で見つけ買い求めることができた。初版から五十年以上も経過しているその絵本は、色褪せるどころか輝いて見えた。

二〇〇二年、私は、同じ売り場で〝Virginia Lee Burton：A life in Art〟に出会った。Barbara Elleman（児童文学の評論家でマサチューセッツ州在住）が、二〇〇二年に出版したビジュアル伝記で、バートンの絵や写真が多く入れられており、彼女の人生について想像をふくらませることができ、目を瞠（みは）った。

このたび、二〇〇四年にその本が、宮城正枝訳によって、「ヴァージニア・リー・バートン『ちいさいおうち』の作者の素顔」として、岩波書店より出版されたので紹介したい。

バートンの生涯

今まで、バートンの子ども時代は、MITの初代の学部長で、ピアリの北極探検にも参加した科学者の父（アルフレッド・エドガー・バートン）と、イギリス生まれの詩人で音楽家の母（リーナ・ダルケイス・イエイツ）のもとに育ち、恵まれていて、陰りのないものと思われていた。

バーバラ・エルマンの著書によれば、バートンはアメリカで初めてのモンテッソリ教育を受け、遊びの感覚と、ダンスや音楽への愛を育てられたという。伝記には、バートンがダンスをしている写真や

木彫、ブロンズが載っており、ダンスが彼女の世界を支えていたのがわかる。

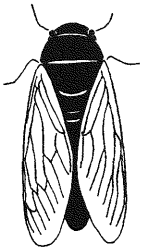
ところが、一九二五年に、母リーナが、MITの元学生だった二十四歳年下のカール・チェリーと同棲するために、夫と子どもを捨てて、去っていったのである。夜中に、起こされて、母から「カールと一緒に暮らすために道を下って行くから」と告げられたのは、バートンが十六歳の時である。

最も感受性が強い思春期において、この母親の行動は、バートンに、衝撃的な影響を与えたに違いないと思われる。

この衝撃を和らげるために、バートンは、エネルギーを美術に注ぎ、高校三年生の時に、カリフォルニア美術学校の奨学金を獲得する。

バートンの息子によると、バートンは、自分が体験したようなつらいことを子どもに経験させてはならないと、自分の家庭を大切にし、その生活は『せいめいのれきし』の後半に描かれているとおりであったという。

後に、バートンは、母親と和解して、母のもとを訪れている。



しかし、彼女は、絵本『皇帝の新しき着物』(1949)の巻頭で、金色の額縁の中に、父親が紫色の椅子に腰掛けて、バートンを含む三人の子どもにアンデルセンの『皇帝の新しき着物』を読んでやっている姿を描き、「感謝を込めて」と記しているが、生涯、母親の姿は描かなかった。

他に、建築家と最高裁判所判事という二人の異母兄のことや、彫刻家の夫ジョージ・デメトリアスとの出会いや葛藤についてもふれられており興味深い。

戦争下のアメリカでの絵本製作

『ちいさいおうち』が出版されたのが一九四二年で、第二次世界大戦中のことである。翌年の一九四三

年には、バートンは『ちいさいおうち』によりアメリカ図書館協会が、その年の最も優れた絵本を製作した画家に贈る、コルデコット賞を受賞していることを、私は、ずっと前から不思議に思っていた。『ちいさいおうち』には、戦争の暗い影は全くみられず、四季のめぐりの中で平和な生活を送る様子が描かれている。

同じ頃、日本では、ミクニノコドモ、銃後の子ども、一億総火の玉等の言葉がおどる戦争、軍事絵本の時代であった。

この伝記の第四章「黄金のメダル」に、その頃のことが描かれている。この時代（一九四〇年代前半）は、第二次世界大戦が心の中に影を落としており、バートンと夫デメトリアスにとっても例外ではなかった。食料は不足し、庭仕事は楽しみのためでなく必要不可欠のものとなり、豆、トマト、トウモロコシが熟れると、それをビン詰めにする作業が、原稿の締切日より優先した。デメトリアスは、アメリカ兵のガスマスクを開発するＭＩＴのために、標準的な、男性の頭部を作ることにかかわった。バートンは、夜は灯火管制になるので、二時間、時計を早めて、昼の時間を有効に使う過酷なスケジュールを課した。彼女は一生のうちに十三冊の子どもの本を手掛けたが、そのうち、五冊が、この時期に製作された。

しかし、作品は、どれも、テーマも物語の展開や内容も、戦争の荒廃からは程遠く、目を細めて笑いながら昇る金色の太陽に象徴されるように、生きる喜びと、幸福感あふれるものであった。

これは、アメリカでは特別なことでなく、この時代に、家庭が直面した生活必需品の欠乏や、父親の不在、爆撃による破壊などを反映した子どもの本は、他にも見られないという。混乱の時代にこそ、子どもには、保護された安心感が必要という絵本製作の姿勢にアメリカ民主主義の懐の深さを感じる。

（松本短期大学）